

# 1 研究主題 「継続的な児童会活動を通して自主性を育てる」 — さつまいも作りをとおして —

足利市立松田小学校

## 2 研究主題設定の理由

### ○ 教育目標と児童会活動との関連

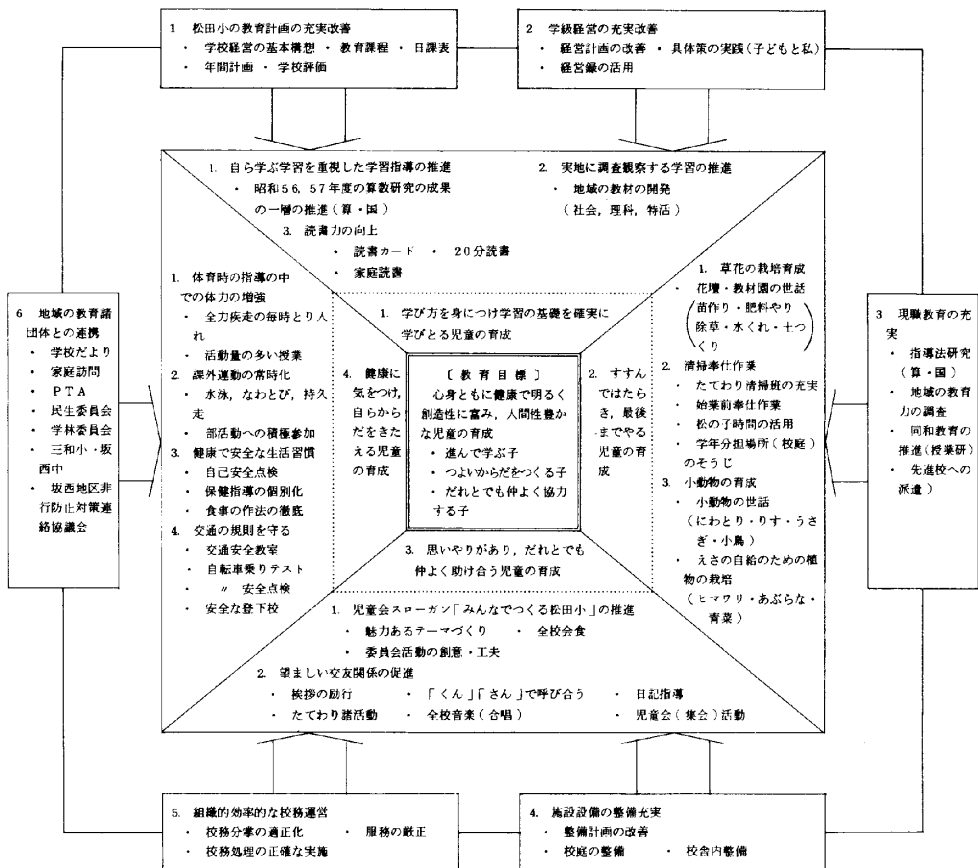
本校では、

心身ともに健康で明るく創造性に富み、人間性豊かな児童の育成をめざし、

- ・ 進んで学ぶ子
- ・ つよいかからだをつくる子
- ・ だれとでも仲よく協力する子

を、教育目標とし、その具現のために、各教科・道徳・特別活動等すべての教育活動を通して、努力している。

図-1 昭和58年度 学校経営全体構想



児童会活動は、「思いやりがあり、だれとでも仲よく助け合う児童の育成」の教育活動として、重視し、具体策を立て実践している。

### ○ 児童の実態から

児童会活動は、次第に活動態勢も整い内容も充実してきた。しかし、その児童の活動状況は、

- ① 活動内容について、児童は先年度の内容を踏襲したが、そこからぬけ出られない。
- ② 児童の自発的・主体的な活動が少ない。教師に言われないと動き出さないし、教師に言われた通りのことしかやらない傾向がある。
- ③ 代表委員会では、発言が少なく低調である。

などである。

### ○ 児童会活動をより自主的・実践的に

今までの児童会活動の指導をふりかえり、次のことを確認し合った。

学校生活の中にある身近な問題に気づき、みんなで考えを出し合って解決し、豊かな楽しい学校生活にする児童会は、自主性や実践力を育てのばしやすい活動の場である。

児童会活動を一層自主的・実践的にすすめさせるために、

- ① 児童により興味ある具体的な目標を持たせることが必要であること。

児童が興味ある目標をもったとき、児童はその目標を達成したいために、解決しなければならぬ問題に気づき、みんなで考えを出し合い、実践することになるであろう。そこに自主的・実践的態度ががられ、それを育てる場があると考え。見方をかえれば、いかに問題に気づかせ、直面させるかであるともいえよう。

- ② 失敗もさせ、児童の力で試行させてみる。

今までは、児童に失敗をさせないようにと配慮する指導をしてきた。しかし、児童がする活動のなかには、新しく経験するものが多い。大人のようによい考えが、そう出し合えるものではない。児童は失敗をくり返し、反省しながらよりよいものを生み出そうと、試行し実践していくものである。失敗も児童にとって、大切な経験である。

児童の失敗を許すことができないものであったり、児童が失敗し工夫するゆとりのない活動では、児童の自主性や実践力はのばしにくいのではないかと考える。失敗するゆとりのないような短期間の活動より、実践しながら失敗を生かし創造できる長期にわたる活動がよいのではないかと考える。

こうした考え方に立って、活動をより長期的で、児童自身が興味をもって生き生きと取り組むことができるような活動のテーマづくりをさせることにした。

## 3 実践記録

### ○ さつまいもを作ろう

長期的で、児童自身が興味をもって取り組むような活動とは、どんなものがあるのか。教師間の話し合いでは、「米作りはどうか。松田の子は、農家の子が多いが、農業が機械化された

ため、子供の手を必要としないので、米作りについて、案外知らないのではないか。」「じゃがいもやさつまいも作りはどうか。遠足の時に、なべなどをして、みんなで楽しめるのではないか。」「もち米はどうか。自分たちで作ったお米で、もちをついたり、食べたりするのも楽しい。」という、作物作りが上げられた。このほかにも、「とうもろこし」、「大豆」などの意見があった。また、作物の栽培以外では、「児童の育てているうさぎが増え、小屋がせまくなったので、うさぎの牧場を作ったらどうか。低学年の子が、特に喜ぶだろうし、1年の理科の学習にも役立つ」という意見もあった。しかし、今年度は、試行の年でもあるので、みんなで長期間取り組めるもの、児童の取り組みやすいものがよいと考え、作物の栽培を取り上げることにした。それは、

- ① 植物が相手であるから、放っておくと、すぐ枯れる。
- ② その時々に応じた手立てを加える必要がある。
- ③ しかも、長期にわたった活動となる。
- ④ よく育っているか一目でよく分かる。
- ⑤ 児童の興味・関心と合っているため、意欲や創造をわかせることができやすい。
- ⑥ みんなでやらざるをえない条件が揃っている。そして、それが児童にも具体的に見える。
- ⑦ 食べる楽しみがある。

という、理由からである。

さっそく、児童会の本部役員を集め、今年の児童会は、一つのことを、長い期間をかけて活動すること。そのため、今年は何か作物を栽培したらどうかと、問いかけてみた。彼等は、初めこの意味がよく理解できなかったようだ。彼等は、去年までの児童会活動を、頭の中に思い描いており、できれば、今年度は、ゲーム集会を多くしたいといった程度の考えしかなかったからである。それだけに、作物を栽培しようという、児童にとっては突飛とも思える考えに、それが児童会活動と、どのように結びつくのかが理解できなかったのである。

本部役員が苦慮していることを担任から聞き、今年度の児童会活動のテーマづくりについて話し合う学級が見られた。作物の栽培を児童会でやることに、児童は大いに興味を示した。5年の学級では、米・トウモロコシ・大豆・じゃがいも・さつまいも・さやえんどう等が、児童の間から上げられた。育てやすいものは何か、自分達だけでできることは何か、という観点と焚き火で焼きいもにして食べてみたいという願いから、さつまいも作りがよいだろうということになった。

#### ○ 本部役員のとまどい

本部役員のもとに、5年生からの、「さつまいもを作って食べよう。」という意見が伝えられると、彼等は、すぐに集まって、そのことについて検討を始めた。

まず、さつまいもを作って食べることの中には、具体的に、どんな活動があり、その中に、どんな問題があるのかを予想してみた。

- ・ 畑をどこに作るのか。

- ・ 畑の広さは、どのくらいがよいか。
- ・ 畑作りには、どれくらいの時間と労力がかかるのか。
- ・ 苗は、どのくらい必要か。
- ・ 苗の代金は、どうするのか。
- ・ いつ頃植え、いつ頃収穫できるのか。
- ・ どんなふうな世話をするのか。
- ・ 収穫をどんなふうにしたらよいか。
- ・ さつまいもを焼く燃料をどうするのか。
- ・ 収穫したさつまいもを、よりよく活用するためにはどうするか。

など、たくさんの問題が待ち構えていることが、本部役員の児童にも分った。

次に、理科主任の教師や用務員のおじさんに、自分たちだけでさつまいも作りができるだろうかとたずねたり、植物図鑑などで調べたりした。その結果、みんなの協力さえあれば、決して難しいことではないことが分った。予想される数多くの問題に、全校児童が、一丸となつてぶつかっていく中で、児童会活動が、今までより、より深く、よりダイナミックに展開することが、児童にもおよそながら理解されてきた。

これらのことから、本部役員の児童も、やってみたいという興味を抱いたが、はたして、できるだろうかという不安も、まだ残っていた。何事にもまして、この計画は、全校児童の協力がなしには、成し得ないからである。不安は残したままであるが、みんなに積極的に働きかけていこうということで、話がまとまり、今年の児童会で取り上げることになった。

#### ○ すんなり行きすぎた児童会総会

4月30日に予定している児童会総会では、例年、1年間の児童会活動の計画等が話し合われる。そのため、4月の第1回代表委員会で児童会総会の議題を発表したが、その際、児童会本部としては、「さつまいもを作って、秋にはみんなで収穫祭をしよう」を提案し、説明をした。議題は、学級に持ち帰られ、総会の日までに、よく話し合うことになった。

##### 児童会総会の主な議題

- 1 今年の児童会行事の計画を立てよう。
  - (1) 収穫祭をしよう。 (1・2学期)
  - (2) 6年生をりっぱに送ろう。 (3学期)
  - (3) すすはらい集会 (12月)
  - (4) 会食会
    - 1年生歓迎会食会 (4月)
    - 感謝の集い (11月)
    - 6年生を送る会 (3月 …… (2)と共通)

「収穫祭をしよう。」という議題は、児童会総会において、特別な質問や意見もなく可決された。事前の学級での話し合いの中で、よく検討され、児童に理解されたためか、それとも、理解が不十分なのだろうか。本校の児童会活動としては、新しい形の活動であり、多くの困難が予想され、全校児童の積極的参加が必要なだけに、活発な質問や意見が出されると期待していたが、あまりにもすんなりと決まってしまう、拍子抜けの感があった。思うに、児童は、さつまいもを育て、それを焼いて食べるという、表面的なことしか考えておらず、今後やらざるをえない状況がたくさんあるということまでも考えがおよんでいないとみられた。

### ○ 畑作りの相談

「収穫祭をしよう。」という、1・2学期のテーマが総会において決まったので、いよいよ本格的な活動が始まる。本部役員は、どこに畑を作ったらよいかと、校内を歩き回った。

初め、校舎のすぐ南側に学級園、東側に教材園があるが、これを利用して畑にしたらどうかという意見があった。しかし、これでは本当に自分たちで作ったことにはならないので、やはり、初めから自分たちで土を掘りおこして畑を作ろうということになった。校庭は、校舎の南側に一段低い位置に広がっていたが、回りには遊具や記念碑があり、とても畑を作るスペースはとれない。やむなく、堅くて、粘土質でよい土質とはいえないが、日当りはなんとか望めそうだということで、北庭の端の一区画が選ばれた。試しにシャベルを入れてみた。粘土質であるため、思ったより堅く、児童の力では歯が立たない。つるはしで土をはがすようにして、それから、土の固まりを崩すようであった。畑作りには、上級生の力が頼りとなった。

職員の間でも、児童の選んだ場所が学校の様子からいって適地であろうと考えていた。教師も実際に試し掘りをしてみて、予想以上の堅さに、児童の手におえるだろうかと心配する声も聞かれた。しかし、他の場所は、ここ以上に悪い条件なのである。まず、児童の手でどれだけできるかやらせてみようということになった。もしかしたら、畑はできないかもしれない。そうしたら、なぜできなかったかを考えさせ、もう一度、立ち向わせればよい。大変なだけに、やりとげたときの喜びや、そこから学ぶだろう協力は、児童の力となるはずであるから。

### ○ なかなか進まぬ畑作り

畑作りの時間は、特別に確保しなかった。あくまで児童の自主的な活動として行わせたいと考えたからである。

5月6日の朝、臨時の全校集会を開き、本部役員から、畑の場所、耕し方、用具の使い方が説明された。また、休み時間や放課後の時間を使って、自分達で、どんどん耕すように伝えた。

その日から、さっそく畑作りが始まった。児童は、土の堅さに驚いた。自然に5・6年の男子がつるはしをふるい、3・4年生たちが土をスコップですくってバケツや一輪車に入れ、それを5・6年の女子が運んでふるうのである。1・2年の児童たちは、大きな土の固まりを、移植ごてで崩したり、バケツを持って、石を拾い集める仕事をした。石は、驚く程よく出た。

つるはしやスコップは、数が少なく、力もいるので、交替で行った。山に囲まれた松田に育った子であるが、慣れぬ力仕事のせいでまめがすぐにできた。

作業時間は、休み時間や放課後ということになっていたが、ある学級では、児童たちの意見でゆとりの時間や、時には学級会の時間を作業に振り向けることもあった。

作業は遅々として進まなかった。休み時間や放課後のせっかくの自由な時間をつぶすのを嫌うためか、作業が大変でなかなかはかどらないためか、働く児童の数は、だんだん少なくなっていた。ほとんど作業らしい作業の行われない日が、2週間ほど続いた。

### ○ 畑作りにエンジンかかる

休み時間や放課後の職員室では、このいきづまった状態に対して、今後どのようにしていくべきかが話題になった。教師側からやらせるのは簡単だが、これでは、児童の自主性が育たぬ。昼休み、つるはしをふるう教師の姿が見られた。

何人かの児童が、教師と一緒に掘り始めた。3年・5年の児童がこれに続いた。5・6年の学級では、男子が畑の一部を分担し、それぞれ責任をもって耕そうということになった。放課後、全職員が作業に加わる日があった。つるはしをふるう女教師の姿も見られた。

作業は、人数も増え、しだいに熱が入ってきた。下校時間を過ぎても作業を続ける児童がたくさんいた。

#### ・ 3年女子の日記から

「きょう、ほうかご、さぎょうをやりました。下校時こくがきたので、先生は終りにしよう、終りにしようというけれど、わたしたちは、6時ごろまでやりました」

天気予報で梅雨の入りが間近に迫っていることを知ると、作業は、一段と熱をおびた。手がまめだらけの児童が多くなった。粘土質の土だけに、ふるう作業も大変で、なかなかふるいきれなかった。ふるった土と同量の石が出た。

#### ・ 6年男子の日記から

5月31日(火)「自分の割り当ての場所をやった。終わった子もいたが、ほとんどが終らなかった。女子が文句ばかり言って、ふるうほうが進まなかった。文句のでないようにやりたかった」

6月1日(水)「5・6年の割り当ての所が終った。あとは、肥料を入れて、土をかぶせる仕事だ。3・4年生にやってもらうわけだ」

6月2日(木)「3・4年生が、肥料を入れ、土をかぶせてくれた。約半分進んだ。もうすこしでできるぞ。楽しみだ。1・2年生には、石ひろいをしてもらった」

普段教室では目立たない児童でも、体力があり、畑作りに活躍して、クラスで見直された例もあった。

6月3日、最後に畝を切って、児童の手による畑作りは終わった。2.5m×16mの細長い畑が、ようやくできあがった。梅雨入りの前のことである。

## ○ 苗 植 え

畑作りと同時進行で、本部役員は、苗植えの準備を始めていた。学校の隣で野菜を作っているおじさんの家に、聞きに行ったりもした。用務員のおじさんにもたずねた。その結果、自分たちで作った畑の広さでは、約百本の苗が必要なことや、植える間隔、植え方などを教えていただいた。苗は、児童会費より支出して購入した。6月6日(月)、昼休みを使って、全員で苗を植えた。あとあとの世話のことも考え、清掃班ごとに区切って植えることにした。1年生も、大切そうに、そっと植えていた。

## ○ 草にうもれたさつまのつる

水くれは、始めの頃はよくされていたが、しだいに忘れかけてきた。雑草も目立ち始めたが、抜こうという子は、ほとんど見られなかった。だいが雑草が長くなったので、草むしりをするよう、7月の代表委員会で本部役員より呼びかけた。しかし、休み時間や放課後に自主的に行うというものであったため、動き出す児童はほとんど見られなかった。夏の強い日射しを受けて、ぐんぐん伸びる雑草のため、さつまいも畑は、雑草におおわれ、そのまま夏休みに入った。

畑に雑草のはびこるさまを見て、さすがに児童も動き出した。夏休み、学校に遊びにきた際に、畑の草をむしる児童の姿が見られた。登校日に、みんなで除草をする学年もあった。

## ○ カラスにやられた！

畑に行くと、長く伸びた茎の下に、土から首を出したさつまいもを見つけられるまでになった。こうなると、今までの苦しみが楽しみと変る。どのくらい大きさに育ったのだろうかとそっと土をどけ、思いの外大きさに喜ぶ児童の姿も見られた。

収穫祭を心待ちにしていたが、ここに思わぬ邪魔が入った。カラスである。3・4羽畑に降りてきては、土から首を出したさつまいもをさがしてついでむのである。ほんの少しだけ出ているさつまいもなどは、掘って食べてしまうのだから仕末が悪い。

さっそく、本部役員の間で、カラス対策が検討された。学校の回りの畑を見ると銀色のテープが張られているのが目に付く。用務員のおじさんにたずねたら、カラスなどの鳥除けで、テープは農協などで売っているとのこと。自分たちでできることはないかということから、それよりかかしを作ろうということになった。しかし、事は急を要するので困っていたら、古い傘をかかしがわりに立ててもよいと、おじさんに重ねて教えていただいた。古い傘なら学校にはたくさんあるので、その日のうちに畑の中に杭を打ち、古い傘を開いて縛りつけた。

## ○ 9月の代表委員会

9月の代表委員会では、収穫祭をどのようにやるかを議題として話し合い、次のようなプログラムが決まった。

#### 収穫祭のプログラム

- (1) 掘り出す
- (2) コンテスト
  - ① 1番多く収穫した班はどこかを競い合う。
  - ② 1番大きなさつまいもを収穫した班を競い合う。
- (3) 記念写真
- (4) 焼いて食べる。

期日については、学校行事との関係から11月12日(土)となった。

#### ○ こんどは、霜！

11月に入ると、山間の松田では、霜の降りる寒い朝が続いた。さつまいもの葉も霜に当たって茶色に変色してきた。児童は心配になり、それぞれ教師や用務員さん、また家の人にたずねた。その結果、霜に当たるとさつまいもがだめになってしまうこと、だから、なるべく早く収穫した方がよいことが分かった。さっそく、予定の日より前に収穫祭ができないかと本部役員にたずねる児童がいた。教師にも、そういうたくさんの声が聞えた。しかし、あえて変更はしなかった。児童の次の行動を期待したからである。

それでは、ビニルでもかぶせればよいのではないかということで、それに使えるビニルはないかと校内をさがすと、幸いにも畑を全部被うだけのビニルが学校の物置にあった。さっそく引っぱり出して畑にかけた。しかし、そのままだと昼間は反対にむれてしまうという意見もあって、夕方下校のときにかぶせ、朝登校したらとるようにすればよいということになった。児童会の本部役員を中心に、5・6年生が毎日交替でこの作業をした。

#### ○ なんで焼いたらよいのか？

収穫祭の中で一番の大きな問題は、何を使ってやきいもを焼くかということであった。児童たちは、初め藁か落ち葉と考えていた。しかし、家に藁のある人は、持ってきてくれるように呼びかけたが、6束しか集まらなかった。かといって、落ち葉の時期にはまだ早かった。校庭には、あまり落ち葉は見られなかった。このままでは、収穫祭はできないことが、誰の目にも見えていた。「先生、焼きいもしないの。」と教師にたずねる1・2年生の目が、いかにも心配そうだった。

児童会から、収穫祭の時の焼きいもの燃料をどうして集めるかについて、各学級で話し合うようにたのんだ。児童にとって、焼きいもは、収穫祭の中で一番楽しみにしているだけに、これは、児童にとっては大きな問題であった。藁が集まらないことの理由を調べていくと、松田地区の農家では、藁を畳用に売ってしまうので、家に必要な分だけしか残していないことが分かった。みんなで山に落ち葉集めに行けば、児童が作った分ぐらいのさつまいもを焼く落ち葉は、集められるのではないかという意見もあった。5年生から、杉の葉や枯れすすきでも焼けるのではないかという意見が出た。杉の葉や枯れすすきなら、学校の周りにはたくさんある。



本部役員で試しに杉の葉や枯れすすきで焼いてみようということになった。放課後、山に拾いに行き、さつまいもをいくつか掘り出して焼いてみた。30分程で焼き上がった。少しいぶくさかったが、食べられる。

さっそく臨時の班長会議を開き、試し焼きの結果を報告するとともに、収穫祭を1週間延期すること。その間に、自分達の班で使う燃料を、各班で責任を持って集めることが話し合われた。

### ○ 落ち葉の山ができた

それから一週間、班長を中心に自主的に燃料集めが始まった。日曜日に集まって、山に落ち葉を拾いに行く班があった。放課後、校庭や校門の近くの落ち葉を集める班もあった。学校の周りの落ち葉も、班で競って集められた。おかげで学校がきれいになってきた。児童のこうした様子を聞いて、家から藁を車で持ってきてくれた父兄もいた。中には、1年女子で、家にたくさん薪があり、落ち葉集めをしなくても、みんなのさつまいもを焼く分くらいなら、学校に持っていってもいいと親の許可を得た。運ぶのがたいへんなら、家の車で学校に持ってきてもいい、という申し出まで受けたことがあった。しかし、自分達で集める中に協力があり、自分達のさつまいもを焼くにふさわしいことだと考え、ありがたいことだが、丁寧に断わった。

### ○ 収 穫 祭

11月19日、土曜の1校時から収穫祭が行われた。本部役員の説明のあと、清掃班ごとに、さっそく掘り始めた。大きなさつまいもを掘り出しては、歓声があちこちで上った。掘り出されたさつまいもは、班ごとに集められ、係児童の手で計測され、表にまとめられた。

#### 収 穫 祭 コ ン テ ス ト

| はん  | いもぜんぶの重さ | はん  | いもぜんぶの重さ | はん   | いもぜんぶの重さ |
|-----|----------|-----|----------|------|----------|
| 1はん | 2.9 Kg   | 5はん | 3.45 Kg  | 9はん  | 4.65 Kg  |
| 2はん | 2.45 Kg  | 6はん | 2.9 Kg   | 10はん | 3.25 Kg  |
| 3はん | 2 Kg     | 7はん | 2.8 Kg   | 11はん | 2.85 Kg  |
| 4はん | 3.8 Kg   | 8はん | 3.6 Kg   | 12はん | 3.8 Kg   |

1番大きなさつまいもを収穫した班を競い合うことは、班ごとの量を競い合うことと似ていたためカットし、そのかわり、畑作りや世話をよくした人を班で1名選び合い、表彰した。記録係が、班ごとに記念写真を撮った。どの顔も笑顔でいっぱいだった。

### ○ もめた分けかた

さて、いよいよ焼くという段になったとき、ある児童から、一部を残して、学芸会の時、見にいらしたお年寄の方々や家の人に、食べてもらってはどうかという提案が出された。

しかし、この提案に対する反対は強烈であった。不満の表情を、あからさまに出す児童がいた。機関銃のように不平を並べたてる児童もいた。自分達が作ったものだから、自分達で食べ

残りは家に持ち帰り、家の人に食べさせたいというのだ。そんな中で、1年生の児童から、重ねて学芸会の時、お年寄や家の人に、自分達が作ったさつまいもを食べていただきたい意見が出された。さつまいもを、本当に生かすには、どうしたらよいか話し合われた。

1年生の意見に触発されて、5年生から、11月24日の児童会主催の感謝の集いの時にも、お世話になっている方々に食べていただいていたかどうかという提案も出された。これらの提案は、自分達のさつまいもを生かす方法として、大多数の児童の賛成をえた。また、班によって収穫量が違い、少ない班がかawaiiそうだから、みんなが同じになるように分け直そうという意見も出され、可決された。さつまいもは、1度集められ、その中からよさそうなものを学芸会や感謝の集いの時に使うものとして別にし、残りを均等に班に分けた。

さて、いよいよ焼く段になったが、無情にも風が強まり、火災の心配も考えられるので、後日実施ということになった。

#### ○ うれしかったお年寄からの電話

結局、11月24日の感謝の集いの前の時間を使って、みんなで焼いた。自分達で集めた燃料は、焼くには十分過ぎる程あった。お客様に一番先に食べていただいた。児童には、小さいものが1個ずつ渡った。

また、12月8日の学芸会時には、前日児童の中の数名が蒸し器を学校に持ってきて、ふかし、学芸会の昼食に出した。6年女子がお年寄や家の方々から配り始め、次に低学年の児童から順に配り、全員が食べた。「お年寄の方から、ありがとよと言われちゃった。」と喜びに満ちた表情で教師に報告する児童もいた。また、家に帰ってから、わざわざ学校に電話をくれたお年寄もいた。その内容は、「学芸会するとき、子供達の作ったさつまいもをいただいて食べたが、とてもおいしかった。孫にごちそうされたのは初めてだ。手紙を書こうと思ったがうまく書けないので電話した。子供達にありがとうと伝えて欲しい。」というものだった。

家の方々も、学芸会を見終ったの帰りしな、「先生、今年の学芸会、とてもよく発表できた。それに、さつまいもがとってもおいしかった。」と、たくさんの人が言い残して帰っていった。

これらのことは、さっそく各担任から児童達に伝えられた。

## 4 収穫祭についての児童のアンケート

### (1) アンケートの結果

問1 収穫祭をしてよかったですか。

|     | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 合計 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| はい  | 14 | 15 | 21 | 10 | 15 | 14 | 89 |
| いいえ | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  |

(よかった理由の主なもの)

・大きいさつまいもが採れたから。 ・焼きいもが食べられたから。 ・みんなでさつ  
まを焼いて食べたのがよかった。 ・みんなで畑を作って、みんなで育て、みんなで焼  
いて食べたから。 ・わたしたちが作ったさつまいもを、学芸会や感謝の集いのとき、  
お年寄や家の人に食べていただいたこと。 ・学校がきれいになってよかった。

問2 集めて分け直したことは、どうでしたか。

よかった………全員

(よかった理由の主なもの)

・あまり差がありすぎてはいけなから、いいと思う。 ・少ない班がかわいそう。分  
け直してよかった。 ・みんなが作った畑だし、多くとれた班は場所がよかったですだけだ  
から、分け直していいと思う。

問3 家の人に食べていただいたことはどうか。

よかった………88名 よくなかった………1名

(よかった理由の主なもの)

・家の人が喜んでくれたから。 ・私達が育ててきたさつまを、食べてもらったから。

(よくなかった理由)

・自分でもっと食べたかった。(2年女子)

## (2) アンケートの考察

全員の児童が、収穫祭をしてよかったと答えている。その理由として多かったのは、①みんな  
で協力して栽培したこと、②収穫したさつまいもを役立てたこと、である。避けることので  
きない数々の問題を、みんなで相談し、解決していくうちに、仲間意識を高め、さつまいもを  
役立てようという気持ちが感謝の心を高めていったことが、他の設問からもうかがえる。

## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

① やらざるを得ない状況から、創造性が高まり、集団の一員としての自覚も高まった。

畑作りや焼くときの燃料集めなど、次々と沸き上がる問題は、どれをとっても避けること  
のできない問題であり、全児童が力を合わせなければ成し得ないものであった。これらの状  
況にぶつかった児童は、打開策を講じ、積極的に行動していった。また、集団における自分  
の存在価値を見出し、それぞれ、能力に応じた方法で、自発的に活動に取り組んでいた。

② 教師の指導に対する共通理解が図られ、児童の自主的活動が高まった。

教師リードの指示・指導型では、児童の自主性や自治的態度の育成はできないことを、さ  
つまいも作りの活動を通して、教師は実感し、実践によって理解された。たとえ教師の側か  
ら見れば、活動が未熟であることが考えられても、「なすことにより学ぶ」という考えのも  
とに、実践させ、教師はこれを認め、援助することが大切である。このことが実践をともし  
て確認できた。興味や意欲を失いそうになる児童を励まし、見守る教師の姿勢は、児童の自

主性の高まりを促した。

③ 感謝の気持ちに深まりが見られた。

学芸会の時、児童の作ったさつまいもを食べた父母やお年寄の反響は大きかった。「ありがとう。」というたくさんの感謝の言葉が、児童や教師のもとに届けられた。児童は、反響の大きさに驚きと喜びを感じ、感謝することが感謝されることに気付いてきた。

④ 学級会活動と児童会活動との係わりが深くなった。

何を栽培するかという問題に始まり、焼く時の燃料の件、収穫したさつまいもの分配など、代表委員会や全校集会の場でも結論の出ないものも多く、これらの問題は、いく度となく学級に持ちこまれた。学級の中には、次年度の試作も兼ねて、とうもろこしと大豆を栽培したものもあった。また、山に燃料をさがしに出かける学級など、学級会活動と児童会活動との係わりに深さがみられた。

⑤ 学校行事が精選された。

昨年まで、12月の学校裁量の時間に、花壇の肥料作りのため落葉集めを行っていた。今回、児童会活動の中で、児童が自主的に落葉集めをし、その残りがたくさんあるため、学校行事として行う必要がなくなった。

⑥ 他の児童会行事とつながりが出てきた。

単発的に考えていた感謝の集いの児童会行事に、招待者に自分たちのさつまいもを食べていただくということから、「収穫祭をしよう。」という一連の活動と結びついてきた。

(2) 今後の課題

① 来年度の児童会と、どのようにつながりをもたせるか。

来年度も長期的な目標を立て、新しい活動をさせたい。できれば、児童が作った畑を生かすために、また、今年度のさつまいも作りの活動の中に反省される点が多々あるため、もう一度同種の栽培活動を行わせ改善をはかりたい。一例としては、もち米・大豆を栽培して、もちつき大会や豆まき集会をすることも考えられる。児童は今年のさつまいも作りの経験を生じて、新しい活動を創造できると考える。

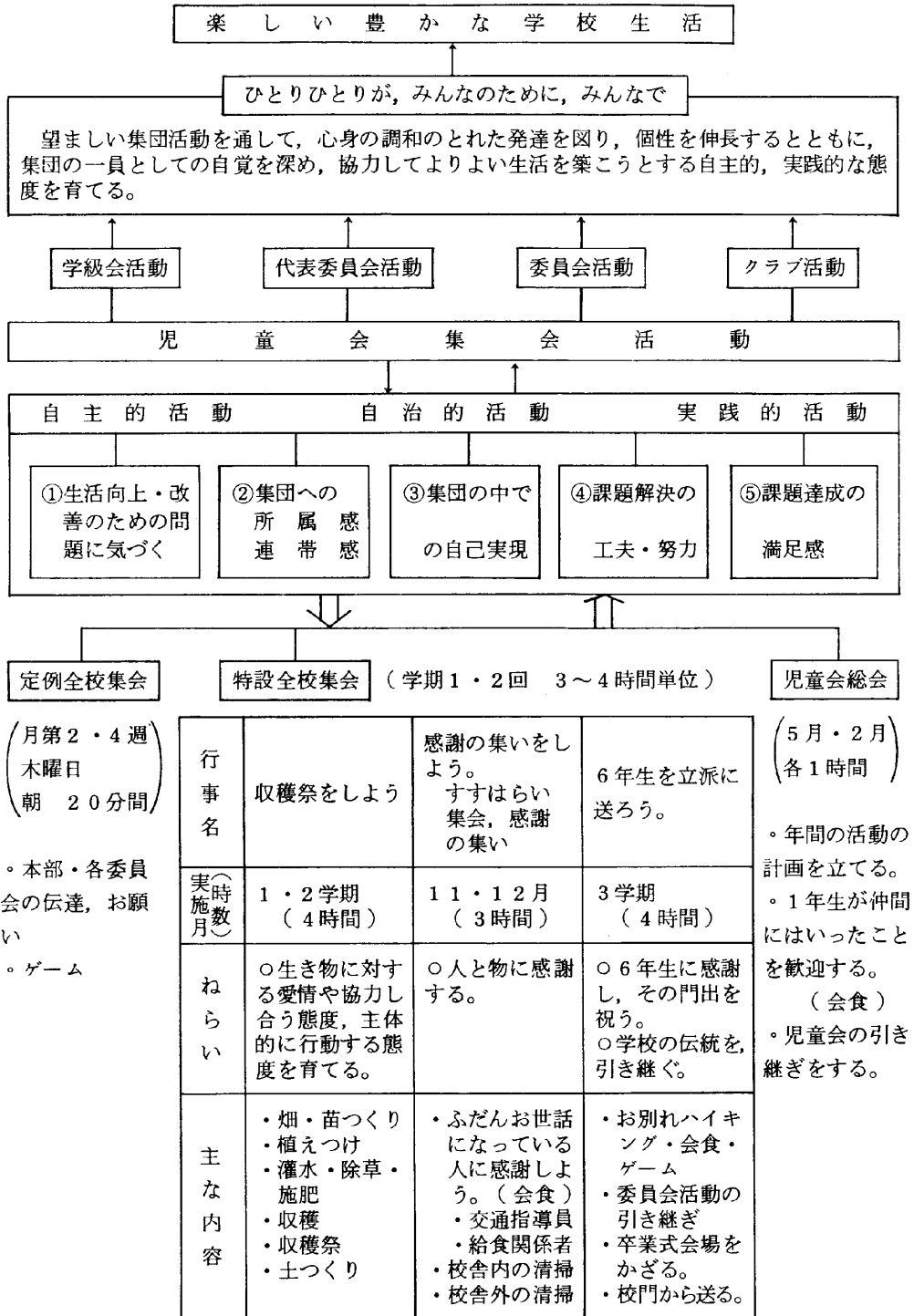
② 児童会行事と委員会活動との関連を強める。

「収穫祭をしよう。」という一連の活動の中に、委員会の担う部分が少なかった。今考えれば、委員会活動の中で、例えばお昼の放送や学校新聞を使って、さつまいもの栽培の仕方、苗の育ちぐあい、収穫の結果を知らせたり、畑作りや除草を呼びかけたりできたはずである。委員会活動が児童会行事を支える反面、委員会にあっては、学校管理上の補助的活動に陥りがちになることを避ける一方法と考える。

③ 児童会集会活動の精選をはかる。

長期継続的な児童会活動により、児童会行事間の関係に深まりができたため、次年度、試案ではあるが、次のように実施したいと考えている。

図一 昭和59年度 児童会集会活動の全体構想(案)



## 評

児童会活動は、全校的な規模で児童の自発的、自治的な活動を育てようとするものであります。しかしながら、代表委員会における話し合いでは、児童の体験が乏しいためか、ともすると今までの活動方法を踏襲するようになり、児童の創意工夫を生かす活動が少なくなりがちです。松田小学校の前年までの活動は、この例に入っていたようです。

そこで、本校では、このような児童会活動の現状から少しでも脱皮するため、「児童に、より興味ある具体的な目標」を持たせることに着眼しました。すなわち、児童に問題を気づかせ、失敗体験を厭わず時間をかけて、根気強く待つ彼等の自主性、自発性を引き出そうとしたわけであります。

その活動は、さつまいも作りを通して、「収穫祭をしよう」という主題のもとに、本部役員の調査や情報収集が始まったのです。ここに、本部役員だけではありますが、試行錯誤や模索の活動を通して、「自分たちでやるのだ」という意欲がわき、自ら解決していこうとする態度が育ってきたものと思います。

この過程で、教師の適切な指導や助言を受けながら、長期間取り組み、収穫したさつまいもをみんなで食べた楽しい会食や、学芸会の折に、お年寄りにさしあげて喜んでいただいた姿は目に浮かぶようであり、この体験は次の活動への自信につながっていくものと思います。そして、このような活動は、回を重ねるに従い、条件整備がされ、役割分担も明確になり、児童会行事の伝統として継続されていくにちがひありません。まさに、地域の特色を生かした児童会活動の実践例であり、息長く児童の自主的活動を育てた活動例であると思います。